

竹陵書言

大胆に書くこと。手本にも周囲の人々にとらわれず、一切の雑念を去って、無心に張りきった心で大胆に書くこと。(中略)

要するに、その人の心の通りが表現せられるのであります。すなわち「書は心画なり」ということになってしまっているのであります。

(丸山敏雄著『書道芸術』三十七頁)

大胆に書く

創作の場合は、自分の思いのたけをぶつけんとばかりに書きます。臨書の場合は、お手本に似せて書くことだけを思つて、ともに「一切の雑念を去って、無心に張りきった心で大胆に」書きましょう。

また、筆を持てば特に意識をしなくても、自ずとそういう心持ちになれるのが書の醍醐味です。

臨書の場合、練習では、書いてからお手本と見比べるのはとても大事です。

しかし、いざ作品作りとなったら、あまり細かいところにまではとらわれず、手本より上手に書こうという気概を持って大胆に書きましょう。

手本のようにはとも書けないと

縮こまって書くよりも、手本より上手く書くんだと思つて臨んだ方が良い書が書けます。その気概が大切なのです。是非実践してみてください。また、周囲の人々にとらわれるのもよくありません。

例えばAさんは台所で作品を書くことが多く、その度に妻からよく話かけられることを気にしていました。が、もうとらわれなくなりました。

それはともかく、周囲の目が気になるのは、下手と思われたくない、上手く見せたいという気持ちがあるからです。

書は自分がそのまま現れるのですから、ごまかしは一切ききません。どう繕っても自分以上にはなれません。今の自分にできる精一杯をただやり切っていきましょう。